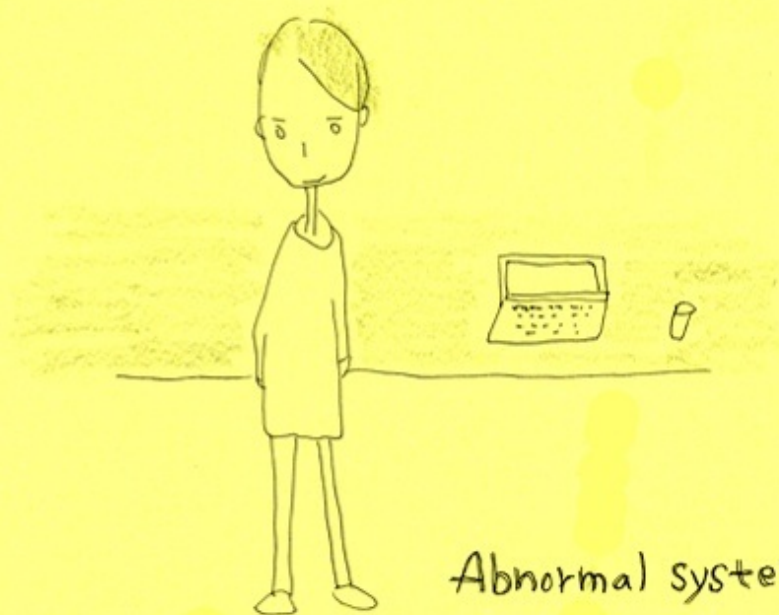


オムライズ



空が明るくなり始めた頃、最後の原稿をメールしてスケジュールどおり二ヶ月のオフに入った。

少し仮眠してキッチンに入ると冷蔵庫に妻からのメモ。

--夕食期待してます--

仮眠する前にセットしておいた炊飯器にはおいしく炊けたご飯が入っている。終業式で昼に帰ってくる娘にオムライスを出そうとチキンライスの下ごしらえを始める。

子どもの頃、夏休みになると母はよくオムライスを作ってくれた。甘酸っぱいトマトソースとふんわりとした卵の食感が今でも夏の記憶としてぼくに残っている。ぼくは母のまねをして娘が幼稚園の頃から夏休みにはオムライスを作るようになった。ただ、残念ながら母の作ってくれたオムライスの味をぼくは作ることができない。学校生活最後の夏休み。まったく内定がとれずに焦り始めていた頃。なんとか小さな出版社に就職が決まり帰省しようとしていた朝、母はあっけなく死んでしまった。列車に乗っていたぼくは就職活動用に使い始めた携帯電話で母の死を知った。その時、真っ先に思ったのはオムライスのレシピを聞いていないことだった。

マッシュルームをスライスする。

娘はマッシュルームが大好きだ。はじめてオムライスを食べた幼稚園児の娘は目を丸くして「おいしいね」と何度も言っていた。この頃の話はぼくの処女作「竜を倒す」に描かれている。

マッシュルームは山形県舟形町という町から取り寄せている。他の食材はみな近所のスーパーで主にぼくが買ってくるのだが、マッシュルームだけは娘が小学校五年生からインターネットで通販している。そして、一年中家ではマッシュルームを切らすことはない。

「なんでそんなにマッシュルームが好きなの」つい先月ぼくは娘に聞いてみた。何か、ネットで募集していたキノコ料理のレシピコンクールでグランプリに娘のものが選ばれ、興奮して家中を歩き回る彼女の後ろをついて歩きながらそれまでなんで聞かなかったのかなと思った。「マッシュルームを食べると宇宙が見えるの」その時の衝撃は今でも覚えている。娘は夢見る乙女風なというか、ファンタジーの中に生きているようなところがあるのは前から知っていた。おっとりとした語り口で彼女が作り出す物語を聞くことはぼくの楽しみでもあった。ただ、そんな物語はどこかぎりぎりのところで現実世界と繋がっているようで、それで何か安心していたと思う。それが、その一言で娘がぼくの知らない異星人のように思えてしまった。

「おいしくって宇宙にふわふわ浮いてるように思うってことじゃないの」娘が自分の部屋に戻った後、あまりにもへこんでいるぼくを見かねて妻はそう言った。そうなのかな。貴美果はスピリチュアル系じゃない？まだ落ち込んでそう聞き返したぼくに妻は「知らない」とそっけなく答えて風呂場に行ってしまった。彼女は娘のことが心配じゃないのかな。

鶏のもも肉を1cm角くらいに切る。

鶏肉で思い出すのはまだ付き合う前の妻とはじめて二人でご飯を食べに行った時のこと。名古屋

屋出身の妻は名古屋料理の店にぼくを連れて行き、それまでぼくが食べたことがないような料理を一人で勝手に注文していた。「まだ手羽先食べれる」一通り食べ終わった頃、妻はそう聞きながら、まだぼくの返事を聞く前に手羽先を注文していた。そして、運ばれてきた手羽先を、驚いているぼくを尻目に全部一人で食べてしまった。手羽先食べれると聞いてきたのはなんだったのだろう。よく分からない。でも、彼女が鶏肉を好きなのはよく知っている。今でも手羽先は好物のようだ。

妻は鶏肉は好きだが、娘のように産地を指定してそれ以外はだめということはない。ぼくがスーパーで買ってきた安売りのもも肉を冷蔵庫で見つけるといつもより一オクターブくらい高い声で「鶏肉だー」と叫ぶ。産地には拘らないが、彼女にとって鶏肉は特別な存在なのだろう。一度、鶏肉だと嘘をついて鰐の肉を食わせたことがあるが、その時は、三日間口を利いてくれなかった。

下ごしらえが終わったので娘が帰ってくるのを待つ事にした。パソコンに、彼女が学校行事で行った登山の写真を入れてくれたのを思い出した。リビングに置いてあるノートパソコンで書斎のサーバーにログインして写真をスライドショーしてみる。娘は全体的には妻似だと思う。綺麗で背が高い。中学二年生だから男子はもう少し背は伸びるだろうが、今はほとんどの男子よりも背が高い。本人は気にしてあまり教えてくれないが、170センチ近くはあると思う。ただ、明らかに妻と違うのは、娘はぼくに似て色黒なのだ。彼女は大人になったらそのことも気にするようになるのだろうか。友達と一緒に屈託なく笑い、ピースをしている記念写真を見てもうあと六年で彼女は大人になるのだと改めて思った。思わずため息がでる。そして、大人の娘を想像する次にくるもの。花嫁の父となったぼくはどんなことになってしまうのだろう。

同じグループに入れられた写真の最後は登山の写真ではなかった。近所の公園で娘と同じ年頃の男の子とのツーショット写真だった。男の子をよく見るとどこかで見た覚えがある。サーバーに残されている過去の写真を開いていく。その子は、この家に引っ越す前の家での最後の記念写真に写っていた。隣の家にはいた真琴くん。引っ越しをしたのは娘が小学校五年の夏休みだから三年前になる。今でも彼と連絡を取り合っているのだろうか。というか、二人は付き合っているのか。付き合ってもおかしくはないだろう。幼稚園時代、娘を守ろうとドラゴンとあだ名されていた近所のブルドックに彼は噛み付いたことがある。それからずっと真琴くんは娘を守るナイト役をしていたと後で妻に聞いた。

「お父さん、ただいま」

娘が帰ってきた。慌ててノートパソコンを閉じる。

「おかえり。今オムライス作るから」

娘ははいと返事をして自分の部屋に入ってしまった。彼女はわざと真琴くんとの写真をパソコンに入れておいたのだろうか。今はとてもそんなことを聞く度胸がない。キッチンに戻り、用意しておいた具材を炒め始める。

「お父さん、午後一緒に公園に行かない」

着替えをして冷蔵庫からミネラルウォーターを瓶ごと持ち出しながら娘は聞いてきた。ぼくも今日から夏休みだということを彼女は知っている。真琴くんと写真を撮った公園になんの用だろう。

「いいけど。じゃ、その後夕食の買い出し付き合ってくれる」

「うん。京王に行くの」

ぼくはしばらく考えた、公園に行くといっても一時間もいないだろう。八時頃帰ってくる妻の帰宅には十分間に合う。

「今日は青山まで行こうと思うんだけどいいかな」

うんと頷き彼女は携帯を取り出し何かメールをしていた。

「オムライス久しぶりだね。今日のもおいしかった。私片付けるからお出かけの準備してて」

娘はそういうと皿をシンクに運ぶ。準備といっても別に何もないので書斎でメールチェックをすることにした。朝、原稿を送った編集部から原稿受け取ったことと休みを楽しんでくださいとの挨拶メールが着ていた。適当に返信をしてパソコンの電源を落とす。ふと思い立ちデジカメを持って行くことにした。リビングに戻ると娘も出かける準備は終わっている。

車で公園には一分とかからない。駐車場に止め、彼女の目的地に歩いて行くほうが時間がかかった。

「私、最近ここである人とおしゃべりするのがすごく楽しいんだ。今日、お父さんにその人を紹介しようと思って」

ある人とは真琴くんだろうか。娘の目的地はどうやらあの写真の場所のようだ。気がつくとも心臓がバクバクしている。吐きそうだ。

「その人ってどんな人なの」自分の声がうわずっているのがわかる。

「歳はお父さんのおじいちゃんと同じ歳だって」えっ。真琴くんじゃないんだ。

「へー、そんな年上の人と何を話すの」

「現象学とか。言語ゲームとか」

娘の口からそんな言葉が出るとは思わなかった。どちらも、20世紀に考えだされた哲学に関係している。

「あそこがその人の家なの」

娘が指差した先には、公園の林にロープを這わせてビニールシートを被せた家があった。そして、その家の入口付近に老人が倒れているのが見えた。

「マキノさん!」

娘は倒れている老人に叫びながら駆け寄った。ぼくも急いで彼女の後ろについて行く。彼は一目見て死んでいるのが分かった。ただ、こういう場面に遭遇したことがないのでどうすればいいのか分からない。なんとなく、心臓の音がしないか胸に耳をつけたり、手のひらの下に指を押し当てて脈がないか調べたりした。どちらも何の反応もない。

「すみません。男の人が死んでるみたいなんですけれど」
ぼくは携帯で警察に電話をした。

娘と二人、警察を出たのは七時過ぎ。妻には時々情報をメールしていた。警察は最初から事件ではないと思っていたようで、ぼくがメールをしているのを見ても何も言わなかった。事件だと思っていればそんなことはできなかつただろう。

妻に電話をして今日は彼女の会社の近くで外食をすることにした。

家までの車の中、ぼくたちは何も話さなかった。娘は助手席でずっと携帯でメールをしている。時々、カチャとかいう音がするだけだった。

着替えをしてタクシーに乗る。

「大切な人を亡くすのはつらいことだね」

ぼくの言葉にも娘は反応しない。どれだけの悲しさが彼女の中にあふれているのだろうか。母が死んで二十年目に書いた小説「すり鉢」で初めて母の死を客観的に表現できたと思う。冷静になるにはそれだけの時間が必要だった。ぼくの場合にはまた別の理由があって時間がかかったのだけだ。

「お父さんは、死んだら人間どうなると思う」

しばらくすると娘は急に喋り出した。

「ぼくは、人間死んだら何もない。何も感じないと思う。今の貴美果にはきつい言葉かもしれないけど死んだらおしまい、だと思う」

「そうなんだ。死後の世界とか輪廻転生なんかないのかな」

「本当のところはわからない。本当に死んだ人が蘇ったことなんかないと思う。だから死んだ後どうだったか話してくれる人はいない。とりあえず、分からない時には最悪のパターンを念頭に置くのがぼくの主義だな」

「あれ、死後の世界を見た、とかいう本があるじゃない。あれは何なの」

「心臓が一時的に止まったり、脈がなくなった人がまた元に戻ることはたまにはあるんだよ。でも、その人たちも脳死を経験してないと思う。脳死から生還することはありえないんじゃないかな」

もちろんぼくはイエスのことを考えていた。死んで三日目に蘇ったイエス。でもそれはほとんど伝説で、伝説の存在意義はそれが実際に起きたかどうかではなく、後世の人がその伝説に意味を見いだしたどうかなのだと思う。意味を見いだしたからぼくたちはイエスの物語を知っているし宗教にもなった。でも、本当はイエスという人は神の子どもではないとぼくは思う。

都心環状線に入った。また娘は黙り込んでいる。ぼくは彼女に自分の母の死について話してみようと思った。

「ぼくの母親の話って貴美果にはしたことないよね。ちょっと、そのことを話してもいいかな

」

娘は黙って頷いた。そういえば、もう彼女はメールをしていないようだ。

「大学四年の夏にぼくの母親は死んだ。クモ膜下出血だったんだけど、夜寝ている間に起きたの。長野のおじいちゃんが朝起きたら、隣でもう冷たくなってたんだ。おじいちゃんはただびっくりして、しばらく悲しいとは思わなかったんだって。ぼくはその日に長野に帰る予定だったんだけど、上野駅を出てすぐに携帯に電話がかかってきたんだ」

今はタクシーの後部座席に娘と座っているのだけど、あの夏のことが、まるでタイムスリップをしたようにリアルに感じる事ができた。

「母親の死を知って、ぼくは何を思ったと貴美果は思う」

彼女は首を横に振るだけだった。

「真っ先に思ったのは、オムライスのレシピを聞いてないことだったんだ。そのことが、ずっとぼくの心に暗く残ってしまった。自分は薄情な人間なんじゃないかってね。母親を亡くした悲しみよりも先に、自分が作りたかったオムライスの作り方が気になってしまったんだ」

母親を亡くす悲しみよりも、自分は薄情な人間だということを認めなければならない悲しさの方が大きかった。それがまた嫌なことだった。

「母親を亡くした悲しみを客観的に表現できたのはけっこう最近のことなんだ」

「あ、それ『すり鉢』のことでしょ」

娘は少しいたずらっぽく笑った。笑う彼女を見るのは数時間ぶりだ。

「そうだけど、なんで知ってるの。今まで一度もこの話はしてないし、あの本のこと知らないと思ってたけど」

「真琴くんに教えてもらった。彼、お父さんの大ファンなんだよ」

そこに真琴くんが出てくるのか。

「ああ、町田で隣に住んでた真琴くんか」

「そう。この間、真琴くんこっちに来てくれたの。同じクラスで好きな子がいるんだけどって話をずっとしてた」

真琴くんと付き合ってたわけじゃないんだ。やはりほっとしてしまう。

「その時、その話をしてくれたの。後で図書館で読んだ」

「貴美果はどう思った」

娘はその時に読んだ本が目の前にあるように、目を閉じて両手を膝に置いた。

「そうか。そうだね。今、思い出した。死んだらどうなるってことより、生きてる私が大切なんだよね。これから、私がマキノさんと出会ったことを大切に生きていけばいいんだ」

そうすると娘はひとりウンウンと頷いていた。もうじき赤坂。妻が待っている。(了)